



TITLE:

フォルボネとケネー

AUTHOR(S):

菱山, 泉

---

CITATION:

菱山, 泉. フォルボネとケネー. 経済論叢 1953, 72(1): 57-76

ISSUE DATE:

1953-07

URL:

<https://doi.org/10.14989/132309>

RIGHT:

# 經濟論叢

第七十二卷 第一號

---

貿易金融と爲替問題 .....	松 井 清	(1)
人間關係論をめぐらる一考察 .....	降 旗 武 彦	(17)
絶對主義への道 .....	角 山 榮	(37)
フォルボネとケネー .....	菱 山 泉	(55)
日本鐵鋼業の市場構造 .....	中 村 忠 一	(77)
實業同志會の結黨 .....	市 原 亮 平	(100)

---

[昭和二十八年七月]

京都大學經濟學會

## フォルボネとケネー<sup>1)</sup>

菱 山 泉

ここで取扱われる主題は、ケネーとフォルボネとを對決させながらフォルボネの理論的なし實験的な前提をつき、彼の位置づけを問題にすることである。兩者を對決させることは、つぎの意味で興味深い。(一)フォルボネはローやカンティヨンと同じ水準とはいわないまでも、ロー以後の新たな思想の展開において非常にすぐれた地位をあたえられること。とりわけケネーの同時代人としてその當時の重商主義者の中の代表的な理論家であつたこと。(二)『經濟表』成立以後のケネーの最大の論敵の一人がフォルボネであつたこと。わけても、『農業・商業・財政評論』(『フィジオクラートの機關誌』)と『商業新報』とを舞台として一七六五—六六年に展開された論争—商・工業の不生産性をめぐつて展開された重農學派といわゆる統制派との論争—において、反對派の旗頭にフォルボネが位していたことは確認されている。[Cf. G. schelle, Dupont de Nemours et l'école physiocratique, p. 40, A. Oncken, Geschichte, ss. 303-304, 300] (三)フォルボネはケネーとともに『百科全書』に寄稿したのであるが、『百科全書』の經濟項目の他の執筆者たるデイドロ、ジョクトール、チュルゴ<sup>2)</sup>、ル・ロワ、ベスリエ、ブランジェなどに比して—項目にあらわれている限りでいえば—、フォルボネとケネーとがそこでの代表的な經濟理論家だといえるであらう。主題の制約により兩者の比較においてはフォルボネをシテとし、ケネーをワキとする。

(1) 小稿は京大人文科學研究所の『百科全書』研究における經濟項目擔當から得た覺書である。そこでの數々の貴重な批判とりわけ河野、島津兩助教授、薄川氏の有益な助言と批判を得た。

(2) チュルゴーが『百科全書』に寄稿した經濟關係項目は、『密進』『市』である。前者は財政的見地からする教會財産論であり、後者には中世的市場機構にたいするレセ・フェールの基調がみられる。そこでのチュルゴーは、まだグルネーの傘下に入り、レセ・フェールの主調においてケネーに通じるものがあるが、理論的には熟していない。

## 二

フオルボネの經濟政策の理念はいかなるものか。「一國における商業（この語は廣義に解すべきである）の目的は、できるだけ多數の人々がその勞働によつて安樂に暮してゆけることである」（『商業』）。また、「國家の目的、それはなしうる限り多くの人々の幸福と安樂な生活にある」（『商業』）。だから、フオルボネにおける經濟政策の理念も、他の項目執筆者と同じく、大多數の人々の幸福とその安樂な生活だと解せられる。「たとえばデイドロは

「富裕と良俗の状態は大多數の者の安樂さ *aisance du grand nombre* の果實である」（『奢侈』）という」。

多くの人たちにとつて働きがいある社會の建設、それは、彼にかぎらず『百科全書』の經濟項目にひろく見うけられる理念といえるであらう。

そこで、フオルボネはかかる理念が具現されるべき經濟の枠組をどう考えていたのか。それは、「國民のいとなむ各種營業のあいだの均衡」（『商業』）あるいは「國民の各種階級と各種營業とのあいだに均衡をうちたてるところ」（『土地の耕作』）、さらに具体的には「耕作者の階級と工匠の階級のあいだの均衡」（同上）、である。つ

まり、「土地」に依存している階級と「勤勞」に依存している階級との協調の世界、いいかえれば、農村と都市との均衡の確立、それが、彼の經濟的理念がそこで實現されるべき枠組であつた。この点に坎する限り、ケネーが「人口稠密なる都市は、よく治められた農村が耕作によつて都市を支えるように、消費によつて農村を支え得ないであろうか。王國の人口と富とは、この双方の協調如何に依存しているのではないか」(『人口・商業・農業に關する重要な質問』、ケネー全集二卷、二二六頁)といつたさいに書いていたものと同じ——農村と都市との協調——だといえよう。

### 三

ところで、この都市と農村との均衡、階級協調の世界はいかにして達成されるであろうか。それには、かかる世界を物的に保證する一定の經濟水準を實現しなければならない。その一定の經濟水準とは、(一)「一國民がその必需品のために他のいかなる國民の援助をもうけない」しかも「最大の輸出のための余剰」をもつ状態、つまり、國內的には經濟的に自足しながら、對外的には全面的に輸出にむかうような態勢、(フオルボネはこの状態を一般的に「實質的な富」*richesse réelle* とよんだ)、(二)他國に比して順なる「貿易差額」(以下においてバランスと略して用いる)をもつこと(彼はこれを「相對的な富」*richesse relative* とよぶ)、がこれである。以上の兩者はたがいに関連なものではない。前者はそれ自体として、后者をうち出すためのリアルな前提となり、后者は順なるバランスのもつ雇用や産業活動にたいする對内効果によつて、前者に決定的な影響をおよぼすものと考えられている。だから、そこでの順なるバランスというのは、ただ貨幣の獲得それ自体が問題ではなくして、フオルボネにおいては——形式

的な貨幣主義から脱脚して——そのもつ國內經濟にたいするリアルな作用が重視されたのである。だからこそ、「二國の人民の安樂さを比較しうるのは、決して貨幣の高によつてではない。かかる比較は、彼らの保有する貨幣額によつて獲得することができると生活用品の質と量とに基づけられるべきである」といいえたのであろう。しかしだからといつても彼の政策的接近の仕方ないし政策の比重からいえば、フォルボネの經濟政策は、やはり貿易第一主義といわねばならない。けだし、彼はその政策体系において順なるバランスのもつ經濟的效果に決定的な重要性をもたせていたからに他ならない。

そこで、以上のような經濟水準「彼はそれを總稱的に「政治的富」richesses politiques とよぶ」を達成するためにいかなる方策をとつているのか。彼の貿易第一主義の建前から當然であるが、それにはまず、輸出商品にかんして他國よりも價格の低廉性を確保することが先決條件だとする。そこで、こういった輸出競争上の優位性を獲得するためには、國內經濟の基礎工作ないし整備が必要となってくる。つまり、(一)生産機構（輸出産業ならびに基礎産業部門）の改革ないし合理化と、(二)それに相應しい流通機構の整備がそれである。フォルボネは輸出産業として第一次的必要度をもつものとして「製造業」を第二次の必要ないし從屬的なものとして「農業」を、基礎産業としては主として「農業」を考えているようにおもわれる。

かかる見地からフォルボネ策定した産業構造の整備策とはつぎのように要約される。

#### (一)生産機構の整備

一、基礎産業部門たる農業の改革。人工放牧法 prairies artificielles を導入してイギリス流の大農經營、いわゆる「新農法」への轉換（《土地の耕作》）

## 二、輸出産業ないし産業一般の合理化。機械や家畜の導入による「人間労働の節約」

「人間労働の節約」ということは、機械や家畜による仕事の方が労働よりも安くつくか、或いは、そうした方が結局は人間をより多く雇用することができるか、いずれかの場合に、それらによつて人間労働を置きかえることから成り立つ」（『商業』）

## （三）流通機構の整備

一、國內經濟にかんしては一定の「政治的利益」の考慮の枠内で自由競争制度を設定すること。「ここで彼のいう「政治的利益」とは「社會の一般的利益」のことであり、その指標は「諸隣國よりも順なる一般的バランスを國家にあたえるプラン」と解せられる。國內の自由競争は、結局、國際的な保護主義的制限体制の枠内にとじこめられる。「フィジオクラートとの相違点の一つ」。そのために、諸州間の自由交流の確立、河川税の廢止、私設關稅や通行税の廢止

二、國際經濟にかんしては順なる一般的バランスの確保と國內産業の育成の見地から、保護主義的制限体制をしくが、從來の國家的特權の附與を基軸としたシステムをとらず、自國の貿易商人にかぎりこれを自由に競争させること「このプランは、國家の特權を特定貿易商社に附與することの反感を含み、後にもるように特權貿易會社攻撃の意圖を含んでいることに注意」（『貿易商社』）

三、輸出諸經費を低廉にすること。これがために、（イ）輸送費の減少——自國船舶の利用、運輸にたいする免稅、（ロ）輸出關稅の廢止ないし輕減、場合によつては輸出獎勵金制度の設定。（『商業』、『土地の耕作』）

## 四、金利体系の改革——低金利制の實施。

以上は、順なるバランスないし輸出競争上の決定的な優位性を獲得するための地ならしとしてフオルボネの提出した産業構造の整備策であるが、それは彼の依據した前提を受けられるかぎり、原則としては殆んど完べきに近いまでの総合性を見せていることは、見逃しえない。フオルボネはフランス重商主義の掉尾を飾る人ではあるが、みぎの綜合政策にあきらかなように、彼の視界は決して流通面へのみ局限されているわけではないし、また彼においては、「循環」circulationの見地から經濟現象に近迫してゆく半ば傳統的なアプローチの仕方がそのまま生産面を輕視するということに直結しない、むしろ、輸出競争上の優位性の獲得という、彼の立場にとつては逃れえないほどの政策的要請からして、貿易ないし流通面に一義的に深い洞察を加えたればこそ、そこから、却つて彼に生産面への考慮とそれに對する理論的な傾斜をうち出させたものといえよう。

- (1) この「實質的な富」と「相對的な富」という富の分類において、前者は生産に裏うちされた、それ自体としての、ないし內在的な富であり、農業の「自然的な富」と手工ないし勤勞の「人為的な富」を内容とし、後者は、貨幣のストックに裏うちされた相對的な——すなわち諸國のそれとの關連における——富である。この二つのタイプへの富の分割法は、フオルボネに特有なものではない。フランス重商主義にかんしていうと、遠くモンテリアンにまでその萌芽を求めえられる傳統的な方法であるように思われる。ただし、ボワギユベール、ローと時代をへるにつれて明確化されてきたのである。周知のとおり、カントニオンには「富それ自体」richesse en elle-mêmeと「相對的な富」richesse comparativeとの區別がみられる「フオルボネは彼と直接の交渉がないことに注意」ケネーの「實質的な富」と「貨幣的な富」の區別も形式的にみれば、この傳統的方法に従っているといえる。だから、それぞれの思想の相違点を見出す端緒は兩者の關連や比重の置きどころにあると思われる。
- (2) 順なるバランスを確保するには、「できるだけ多くの量を最も有利な仕方でも輸出すること」が必要だとしている。ところで、この「最も有利な仕方」とは、「土地の余剰生産物を輸出するための最も利益の多いやり方は、それに加工するか、それ



を精製するかである」を意味するものと解せられる。そこでは、製造品として輸出するのが最も利益があるとしているのだが、しかし、他方で彼は農産物の輸出貿易を否定しない。「もしその土地が他の國よりもヨリ肥沃であるか、或いは、その耕作者がヨリ勤勉であるかすれば、その國は過剰の農産物をもつてあらうし、それは、肥沃度と耕作度にかんして劣つた諸國に販賣されるであらう。この農産物の輸出はそれを行う場合に、質的かつ相對的な効果を及ぼすであらう」。「農業は商業」この語はここでは廣く解されるべきである」とつて不可欠の基礎である」「農業は政治体において人間の営むあらゆる生業の中で第一位に値する」。以上の引用からあきらかにフオルボネは輸出産業として第一次的に製造業第二次的に農業を考え、また農業をもつて素材的にみて本源的な産業部門すなわち基礎産業だとしているものと解せられる。〔《商業》 《土地の耕作》〕

#### 四

ともあれ、フオルボネの政策体系が全体として貿易主義に力点がおかれるものと解せられるならば、その体系を支える決定的な理論的支柱が、いわゆるバランス論にあつたといわねばなるまい。われわれがケネーとの對決を取扱おうとするかぎり——このバランス論を鋭く批判したのがはかならぬケネーであつたことを思えば——まさにそこから問題を展開させるのが適當であらう。

すでに述べたようにフオルボネのバランス論では、ただ順なる貿易のバランスによる貨幣の獲得それ自体が問題にされたのではなくして、流入貨幣の及ぼすリアルな對内効果が重視されたのである。それでは、その効果とはいかなるものか。(一)外國から流入した貨幣は國產商品を「豊富に消費すべき資力をあたえる」。それは國產商品に對する有効需要を介して、國內の産業活動を活況にみちびく。(二)外國からの貨幣の流入は、それだけ流通貨幣總量をふやし、價格に對して漸次的にインフレ効果をもたらし、それが勞働や生産にとつての刺激的要因として働く。

(ロ)外國からの貨幣の流入は貨幣資本の供給量を増加し、利子率をひきさげる。利子率の低減は、生産に對して刺戟的要因として働き、土地が肥沃になり産業活動<sup>インデュストリー</sup>が有利となる前提條件となる。(三)かかる流動資金の増加はそれだけで生産資本に轉化されるべきストックの量をふやすことになるが、以上の(一)(二)によつて導き出されたような生産活動に對する有利な前提の創出はそれの生産資本への轉化を刺戟し、生産を活況に導く。「貨幣としての富 *richesse de convention* がたえず一國に蓄積されると、それと同じ比率で、貨幣についての必要の数がふえてゆく。この新たな必要は仕事の種類をふやすであらう」(《土地の耕作》)。(四)以上のような生産活動の活潑化は、結局、雇用や生活水準に對して有利な効果をもつ。「かかる富「順なるバランスによつて獲得された」は國內を循環することによつて、結局、より多數の市民に安樂な生活をもたらすであらう」(《商業》)。

ところで、ケネーのバランス論批判において攻撃の的となつたテーゼはまさにみぎの(一)と(三)の論点にかんしてゐる。それは次のように定式化されよう。

(一)順なる貿易のバランスによつて得られた貨幣は消費者に附加的な豊富な購買力をあたえ、それが國內の總需要量を増加することになるかどうか。

(二)國內の貨幣總量を増加させるバランスは、それ自体生産資本の原動力としての貨幣の蓄積を容易にして、それは結局、再生産の規模を擴大することになるかどうか。

フオルボネは以上にみたようにこの問題に肯定的に答える。ところがケネーはこれに否定的に答えた。そこで、われわれとしてはケネーの否定的な解答の論據をつき、ついでこれをフオルボネのそれと對決させたい。

まず第一の問題について。ケネーがこれを否定した究極の論據はつぎのテーゼに要約させる。つまり、商品の總

量は年々の再生産によつて限定された一定量であること。しかし、そこでの年々の再生産は最高の發展水準にある均衡値であることがそれである。（『商業について』、全集第三卷三二〇—三二三頁參照）。この據点立つたかぎり、國內商品の輸出の見返りとして獲得された貨幣は、たとい國內需要に向うとしても、そこには對象を見出すことができず「輸出額を控助した總生産物は過不足なく國內需要にむけられるべきであるから」、それがあくまで需要に向うとされる場合には、結局、輸入に向わざるをえず、そこでは流入貨幣そのものは消滅し、受取残はゼロになる。しかるに、あくまでも順なるバランスを確保するためには、この前提に立つたかぎり、通常の國內需要額を減少し、その減少額にみあう部分を輸出にくりこみ、輸入については少くともこれを通常の水準に維持しておかねばならぬ。つまり、國內的な總支出額を減少しなければならない。ところで、ケネーはこの点にかんして、支出の節減ないし節約そのものが、『經濟表』にあらわされた支出の分配的秩序を紊し、ひいては再生産にたいして擾亂的效果を及ぼすものとみた。

第二の問題について。ケネーがこれについて、否定的に答えた論據はつぎのテーゼに要約される。そこではまず最高の發展水準にある再生産という假定を捨てて、發展の途上にある再生産「『増進的繁榮の秩序』という表現でこれをあらわした」という假定をとり、そこで、發展を保證する基本となるものは、純粹にリアルな側面からとらえられた前拂であること、しかもこの前拂は保有貨幣の量に依存しない、そのみならず貨幣の蓄積つまり貯蓄それ自体は、「流通を中斷し、生産物價格を引き下げるから」、前拂としての生産資本を増加させる可能性を減少させる。前拂すなわち生産資本の増加は「支出の良き使用」〔ケネーは「支出」に生産的支出つまり投資と消費的支出の兩面を含ませている〕に結果する〔『商業について』、全集第三卷、二三一—二三二頁參照〕。

以上、ケネーのバランス論攻撃の據点はずまるところのつぎの二点である。

(一) 最高發展水準にある均衡的な再生産の想定つまり『經濟表』の立場に立つ。(二) 貨幣の蓄積ないし「節約」によつて貨幣を退蔵すること」*par l'épargne tésauriser* は、上のような均衡水準においてはもとよりのこと、發展の過程にある再生産の想定のもとにおいても生産に對して沈滯化要因として働くというテーゼがこれである。ところで、上の(一)の前提に立つかぎり、バランス論のもつ先の第一の問題は否定的に答えられねばならない。しかし、この前提を動かせばどうなるか。たとえば、終局的な最高の發展水準にあるという前提をすてて、よりリアリスティックに發展の途上にある再生産の前提に立てば——この前提は明示的ではないがフオルボネのそれであるが——第一の問題は肯定的に答えられる余地が残るであらう。しかし、兩者の根本的な相違をきたさしめたのは、理論上でいうと、むしろ上の(二)のテーゼである。ただし、ケネーは獨特の貯蓄觀ないし節約觀をもっているからである。彼にとつて貨幣蓄積ということは、潜在的な貨幣資本を意味するものではなくして、産業的に機能する可能性を全く奪われた流通からの引上げないし消滅を意味した。かような見地は、多分に當時のフランスにおける貨幣蓄積の現實とそれに特有な信用機構の制度的な制約を受けているかに思われる。ともあれ、かかる前提に立つかぎり、再生産にかんしていかなる局面を想定しようと、貨幣蓄積の生産への通路は絶ちきられることになる。フオルボネがその『經濟表』に對する反駁 [*Principes et observations économiques*, 2vol. 1767 の著作の一部は *la collection Guillaumin des économistes*, t. XIV, pp. 165-289 に公に收められている] において鋭くせまつたのは、まさにこの点であつた。「人々によつて望まれるのは、貴金屬そのものではなくして、むしろ社會における貨幣的な富 *richesses conventionnelles* の繼續的な増加から結果する諸效果、すなわち、その増加によつて生産や人口が必然的に増大

することゝなのである」[op. cit. éd. Guillaumin p. 220]「顯著な貨幣量が新たに商品の流通界に投ぜられる場合、一定の時間の後には不可避免的に商品の價格が騰貴する。それは労働の有用性をひきあげ、それを通じて、仕事をする者や生産をもとに増加する。そして、そこにひきおこされる新たな競争は、利潤を減少させることによつて——利子の低下によつての如く——價格の騰貴を相殺する」[op. cit. pp. 224-225]。ケネーにとつては貨幣側からの生産への通路は遮断され、貨幣の生産に對する刺激要因としての存在は否定され、その生産に對するダイナミックな作用は捨象された。しかし、そのことは却つて彼においては——一面的なしかし透徹したリアルな見地に制約されてはいるが——現實に機能する生産資本の立場を、一義的に鋭くえぐり出すことになつた。しかし、それはまた、貨幣蓄積を否定するのみならず、その生産面への通路——つまり、その生産資本への轉形の可能性——をも遮断することとなつた。フォルボネにおいては、いまだ商業主義の見地に制約されていたとはいへ、貨幣蓄積の潜在的貨幣資本としての存在を、貨幣資本から生産資本への轉形の可能性を洞察したことは、この点に關するかぎりすぐれた見地といわねばなるまい。<sup>2)</sup>

(1) フォルボネは國內への貨幣流入がいかなる種類のものでもこれを肯定したわけではない。彼によると、この貨幣流入を二つのタイプにわけ、第一のものは、十六世紀のいわゆる價格革命にみられる鑛山の開發による突然の大量の流入であり、この種のものは多く有關者階級の手に落ち、生産的に活動しないので高價と大衆の貧困をひきおこすという理由でしりぞけている。第二のタイプは、商業や労働によつてもたらされた貨幣であり、この種の貨幣流入はこれを肯定している。本文で述べられた流入貨幣の對内効果とはこの種のものに關している。

(2) 彼の産業構造の整備策にもあきらかなように、そのバランス論の前提として不可離的に低金利論があつたことはいうまでもないが、ケネーはまたこの低金利論をもつぎのように批判している。「富がこの増進的繁榮の秩序に従う限り、次のことが指

摘されるべきである。すなわち、遊體的な財産が全然なく、それどころか反對に、すべての財産が農業の中に極度に有利な使途を見出して投下されているならば、自己の元本を他人に貸付けるだけの余裕のある人は殆ど存在しないから、貨幣の利子は極めて高率に保たれる筈だということである。……貨幣利子が低下することが既に考えられたように、全く富の増加の證據とならないことも、この理由によつて明かである。更に……利子率の低下が富の増加を意味しないという考察は歴史によつて完全に確認される……」（全集第三卷、二三三頁）。そうはいつてもケネーが高利を擁護しているわけではなく、逆にその率に公正な秤をはめようとしていることはその『貨幣利子に關する考察』にあきらかである。

## 五

以上でわれわれのとつた接近法は、フオルボネの政策体系のポイントと思われるバランス論を介して、それに對するフオルボネとケネーとの論據を攻撃し、兩者の對決をえくり出すことにあつた。そこでは、現實が彼らに對してもつ役割は、いまだ理論的前提をそのものとして固定させるかぎりでの現象的所與としてであつて、いわば体制的所與としてではなかつた。ところで、政策体系の根城を攻略する試みにとつては、その限界でとどまることはできない。けだし、政策体系の究極の據点は、以上のような意味での現象的所與を超越した個人に特有のヴィジョンや確信に、また、いわば現實の体制的所與の枠内に局限された個人の經濟的地勢にあると思われるからである。とはいえ、かような據点をつくには、それに最も有效な道をえらばねばならない。さしあたりその道は經濟的自由制度の問題である。

さきにあげられたフオルボネの産業構造整備策にあきらかなように、彼は國內經濟にかぎつて自由經濟制度を設定しようとした。このプランはつぎのような理由にささえられている。自由競争制度は生産手段・勞働力・貨幣に

かんして、豊富さをうみ出すことによつて、それらの價格の低廉性をうち出すから、それは國內産業の生産條件を有利にし、輸出商品の低廉性を維持するに役立つという理由がこれである。だから、すでに示唆しておいたように、フオルボネはケネーのように内外に及ぼされた普遍的な自由競争制度をうち出す見地からはハッキリと區別されねばならぬ。フオルボネによれば、國內的な自由競争制度はただ輸出競争上の優位性の確保すなわち順なる國際收支の保持という目標を全うするための手段にすぎない。もとより、ケネーにおいても、レセ・フェールはその原理的な表現にもかかわらず、手段的な性格をもつかに思われる。しかし、そのネライは彼とは異なり、國內的なリアルな生産・消費の規模の擴大すなわち再生産の擴大を直接的に指向するにあつた。また、ケネーは對外的には貿易干渉主義ないし保護主義を拒否している。ところが、フオルボネはその立場を對外的には堅持している。「われわれはすでに競争の必要性を證明した。いうまでもなく競争は經濟的自由の核心である。しかし、この行政部分は最もデリケートなものの一つである。その原則は、諸隣國に比してより順なる一般的バランスを國家にもたらすというプランの中に基づけられる」(《商業》)。「政治的利益が商業廣義に經濟活動一般と解すべきである」に及ぼす制限は一個の束縛と看なされることはできない。かの商業の自由ということとは、あれほどしばしば口の端にのぼつたのに向に理解されなかつたものだが、この自由とは、よく知れわたつた社會の一般的利益によつて許されるかぎりでの商業を容易に行いいうるということにすぎない」(《商業》)。

ケネーにとつて、自由競争は普遍的なものであるべきで、それは、人爲的な操作を加えずとも自然的に社會の一般的利益に合致すべきであるのに、フオルボネにとつては、自由競争は特殊なもので社會の一般的利益によつて人爲的にコントロールされるべきで、兩者が自然的に一致する機構はありえない。こういつた兩人の相違はいつた

いどこから出てくるのであろうか。これを經濟面で考察すればこういうべきであらう。ケネーにとつて、普遍的な自由競争制度の設定は、(一)價格機構の自動的な調整作用によつて再生産機構の運行に有利な反應を及ぼすこと、(二)國際價格に對する反應を介して國際經濟制度に安定性をあたえること、(三)國內價格と國際價格の均衡水準を指標とした最高經濟水準を誘導するように資本が競争することを保證すること、である。しかるに、フオルボネにとつては、みぎのテーゼは否定されるべきである。まず第一に、自由制度は國內經濟にかぎり價格機構に有利な反應を示すべきであるが、それだけでは再生産に對する有利な反應は生じえない。第二に、國際制度にはもともと安定性はない。それは擾亂の世界である。國際經濟の自由によつて安定性をもつた價格が自然的に成立してくるのではなくして、そういった價格は、公益の見地からする「公正な水準」に人爲的にコントロールされるべきだとする。かかる立場は「土地の耕作」において展開されたその「公正價格」の主張にあきらかである。こうなると、みぎの(三)は自働的に拒否されなければならない。

かくて、自由制度の問題についての兩者の立場の相違はその價格論に、つまりケネーの「良價」とフオルボネの「公正價格」に、收約されてくる。されば、かかる兩者の立場の相違は價格現象に對する彼らの接近法のちがいに求められるべきであらうか。ないしは、價格論に相違をきたさしめた經濟現象の見方のちがいにあるのだらうか。兩者の立場の相違は、こういうところにはなく、さらに切實なところにあるように思われる。それは、第一に、政策を立案する場合にどの階層ないし階級の利益をまず促進するかという点についての重点の指向の仕方の相違であり、第二に、經濟社會に對する個人的なクレドールないしヴィジョンのちがい——ないしそれを制約する彼らの經濟的地勢の相違——である。



そこで、第一の問題をフォルボネについて追求しよう。これについての最適の突破口は、『商業』における「有用な商業と有用ならざる商業」の區別に關連した「商人の利得と國家の利得との對立」の問題である。

ここでいわれる有用性とは、「政治体との關連においてとらえられた場合」*en considéré par rapport à un corps politique*におけるそれである。いいかえれば「社會の一般的利益」の立場におけるそれである。そこで、いかなる場合に商人の利得と國家の利得とは背反するのであらうか。「もし商人が國內の製造業の製品の消費を阻害するような舶來品を、その國にもたらすならば、商人はこの商品の販賣によつて儲けるであらうが、國家は損失を被るであらう」ところで、ここでいわれる國家の損失とは、彼の指摘している損失の内譯<sup>2)</sup>をみれば、それが國庫的立場からのものでないことは明らかであり、そこには、國產商品を驅逐するような舶來品を輸入する商業は、「有用ならざる商業」だという含意があると看なしてよいであらう。それでは、國家が利得しても商人が損失を蒙るような場合とはいかなるものか。「もし貿易商人が不注意にも、自國の製造品を賣れない國に輸送するとすれば、彼は販賣において損失を蒙るであらう。しかし、國家は外國によつて支拂われる額だけ、いつも利得するであらう」。そして、商人の利得と國家の利益との關係は結局つぎのようにいわれる。「だから、商人の利得は……、國家にとつて完全にインディファレントである」と。

以上からみて、フォルボネが商業の有用性の如何を知るために、商人の利得と國家の利得とを區別しなければならぬとした含意は、商業の有用性如何は國家の利得「國庫的立場からのそれではない」で判斷されるべきで商人の利得で判斷されてはならぬということである。彼が國家の利益ないし社會の一般的利益の見地を強く前面におし出しているかぎり、彼の政策立案の重点が貿易資本にあつたというよりはむしろ、當時の國內産業にあつたものと思われる。それでは、貿易資本そのものについてはどうみなしていたのか。それには、(一)特權的な貿易會社をどう考えたか、(二)仲繼貿易をどう考えたか、(三)對外商業と國內商業の比重をどう取扱つたか、を追求しなければならない。

まず第一の特權的な貿易會社に對しては彼は明らかに否定的立場をとり、フランス貿易資本間の自由を主張する。彼によれば、特權會社は海賊が横行して安全なる航海が保證されず保險制度の知られなかつたような無知蒙昧時代の產物であり、その當時においてはなるほど、それは有用であつた。ところが、文明開化の時代になつてもなお「商人の貪慾と國家の必要からしてかような特權がいつのまにか溫存されてきた」のであつて「かかる偏見は完全には一掃されない」というのは、一般に「推理するよりは模倣する方が便利だから」であつて、「今日でもなお、多くの人たちはある場合には貿易商人の競争を制限することが有益だと考えている」のである。それに反して私設の貿易商社についてはどう考えたか。「かような私設商社の運営については個人の場合と同じように、國家から格別の恩惠をうけることはない。それなのに、いつも産業界から冷やかな眼でむかえられてきた。というのは、競争と名のつくものは、すべて利得をへらすものだからである。しかし、この理由そのものによつて、それは國家にとつてまことに好ましいものとなる。まづたく、貿易は貿易商人の競争によつてのみ擴充もされ完成もされるのである」《貿易商社》「貿易商人の競争といつてもそれはあくまで自國人のみに關していることに注意。ケネーとの相違点」つぎに第二の問題について。フオルボネは仲繼貿易をどうみたか。彼はそれを否定しはしない。しかしそれを輸出貿易と區別し二次的從屬的なものとしてとらえる。「Commerce d'oeconomie すなわち外國商品の再輸出」あきらかに仲繼貿易のことである」の原則と國產商品を取扱う貿易の原則とは區別されねばならない。前者に與えられる獎勵は人口の余剩 *excédent* をえさせる手段である。そういう獎勵は、國民の基幹とみなされるべき多數の人間にとつて決して負擔がかからない限り有益である。それに反して、國產商品の輸出に従う貿易は何らの制限も附されずに獎勵されねばならぬ」(《土地の耕作》)。最後に彼は對外商業と國內商業の北重をどう取扱つたか。彼は國內商業「廣義に理解する要がある」を商業一般の第一位に置いている。「商業が政治体との關連においてとらえられる場合、その機能は(一)、國產ないし植民地產の商品の國內循環、*circulation intérieure* と、(二)余剩品の輸出と、消費のためであれ再輸出のためであれとにかく舶來品の輸入とから成り立つ。この商業の機能についての定義は自然に商業を二部門に分つ。國內商

業と對外商業とがこれである。それら双方の原則は相違しているのであつて、混亂をひきおこさずには同一視されない。國內商業は一社會の成員が相互になすところの商業である。それは商業一般の中で第一位を占める。余剩——といつてもなくてもすませるといつたものではないが——より必要の方が大事だからである」(《商業》)

以上からみて、フォルボネが社會の一般的利益ないし國家の利益として、特殊的利益に對抗させた場合に、彼がその政策の重点を指向したものは——さきの産業整備策の線にそつて改革されるべき——「國內の製造業」とそれに附隨的な「農業」であつたと推定される。彼の貿易主義もかような指向の線に沿つたそれであり、インド會社のような仲繼貿易に立つた特權貿易をきびしく攻撃したのも、そこからであつた。さらに、彼が國內的には自由体制を對外的には制限体制をうち出したのも、つまるところ、かかる政策指向の系であつたと解せられる。

(1) ケネーの自由貿易制度については拙稿、國際的觀點からみたケネー學說の生成とその政策的含意、經濟論叢第七十卷第三号五六—六二頁を參照されたい。

(2) この國家の損失の内譯とは「(一)これらの舶來品が外國で値だけだけの價值、(二)國產商品の使用が各種の勞働者に得させたであらうところの報酬、(三)原料が母國や植民地の土地にもたらしたであらうところの價值、(四)これらすべての價值が國內を循環することから生じる利得、(五)君主が臣民の安樂さから當然期待しうる財源」[以上は舶來品によつて國產品が驅逐されることを前提としている] (《商業》)

(3) フォルボネは、その富觀にあきらかなように、フランス重商主義の傳統の上に立つ。ローの体制崩壊後の思想の展開においてフォルボネは、ダゲソー Daguesseau やベリ・デュヴォルネ Paris-Duverney のようなローにたいする反對の流れと、ムロン Melon やデュット Dutoit のようなローのアポロジの流れとの中間に立つて、カンティヨンと共に中道を進んだ人である。すなわち、ローの思想に批判を加えながらも、ローの深い影響を受けたものと解せられる。[cf. P. Harsin, Les Doc-

trimes monétaires et financières en France, 1928, p. 211] ローに對する体系的な批判を決定的に行つたのは、フィジ  
オクラートであるが、フオルボネが傳統的なフランス重商主義——相對的な貨幣的富の背後に生産に基礎づけられた内在的な  
リアルな富を強く押し出す点にあらわれる——の思考様式の上に立ちながら、「國內循環」circulation intérieureの見地を  
うち出したことは、カンティヨンと共にケネーの再生産の構想の先驅者である。彼らと對照した場合、ケネーの革新的なもの  
は「純生産」の發見にあるのであつて、その再生産の構想そのものは本質的に新しいものではないと思われる。ともあれ、フ  
オルボネがイギリスの重商主義者の影響を受けていることは否定しえない。彼自身對外商業の「原則」は彼らと同じであると  
述べた。ただし、彼はそれをウのみにしたのではなく、リアリステイックな視角から兩國の經濟的相違を分析することを忘れ  
なかつたし、原則の「適用」においてイギリスと異なるものとした。對外商業すなわち貿易にかんする政策のパターンは、い  
わゆる「議會主義的重商主義」のそれにあるのではあるまいか〔彼は一七五三年にスベインの Ustariiz の著作の邦譯と共に  
「British Merchant」の意譯である Le Négociant anglais を公刊している〕。フオルボネの政策の体制的な立場は、特權  
的規制の網の目をぬつて生産面にその支配網をひろげていた merchant-manufacturer すなわち Fabricants の立場といえ  
るように思われる。もしそうであるとすれば、彼はこの立場にあつて國際的視野をもちえた少數の一人であつたのであらう。  
オンケンによつて彼はモントードウアンと共にグルネー派の「正當の翼」と呼ばれていることも想起すべきである。

## 六

さて、自由經濟制度に對して兩者の見地の相違をきたさしめる根據として、殘された第二の問題、經濟社會についての兩者のク  
レドリーないしウィジョンのちがいを追求しよう。すでに述べられたように、ケネーは自由放任制度の中に經濟社會の發展性とその  
安定性をみた。彼にとつて、かかるプロセスこそが自然になつたもので、しかも、社會の一般的利益に合致すべきものであつ  
た。そして、經濟に對する人爲的な干渉は、それがいかなるものであれ、この自然的經路を阻害し擾乱すべきもので、社會にとつ  
て有害であるとされた。彼は經濟社會の原動力を人間の営みの中にはなく、自然の根源的な力の中にみた。人間の営み——技術な

いし勤勞―はそういつた自然を扶助する *agent* ものであつて、創造するものではなく、社會の原動力でもありえない。ケネーの生産的・不妊的の區別は思想的にいえば、人間の勞働がみぎのような自然力を扶助するかどうかによつて規定せられるのである。かような意味での自然中心的な世界觀はレセ・フェールによる社會的調和の具現という信條に支えられていた。ケネーの經濟社會觀を支える究極のクレドーは(一)社會の根源的原動力としての自然「ケネーの自然は單なる素材ではなく、「力」であり活力源である」(二)レセ・フェールによる社會調和である。

しかるに、フォルボネはまずケネー流のレセ・フェールを原則的には拒否している。彼にとつて社會は放任されるべきではなくして、「社會の一般的利益」を洞察した政策家によつて、「計算の精神」*esprit de calcul* によつてコントロールされるべきものであつた。リアリステイックな情勢判斷のうえに立つた立法者が、そのときどきの局面の推移を見越して合理的な手段体系をのみ出し、これを社會に適用すべきであつた。彼の經濟社會觀を支える究極のクレドーは社會の根源的原動力としての制度的な力ないし國家權力であつて、人間の情欲や欲求の競合は、レセ・フェールにおいて調和にゆくのではなく、權力的規則によつてコントロールされることによつてしか、調和を招来しない。

ケネーとフォルボネとは國內においてはともに自由經濟制度を認めたのに、對外關係にまでそれを及ぼすかどうかという点で、ハッキリと相異している。ケネーは國の内外をとわず普遍的にそれを認めたのに、フォルボネは對外關係においてそれを拒否した。かくて、兩者の社會觀を決定的に相違させたキー・ポイントは、國際經濟社會に對する兩者のヴィジョンのちがいに横たわつてゐるといえよう。ケネーにとつて、それは國內における州間の關係に等置された。つまり、彼は國際社會における平和的協調の可能性を確信し、それが國內における州間の關係におけるように、自由制度によつて確保されるところが、フォルボネにとつては國の内と國の外とは決定的に異なつた世界である。なるほど國の内においては、同胞は相互に扶助し協調しあわねばならぬ。「扶助の手を相互にさしをべるのは、同一國家の市民たちであり、同一家族の子らである」(《土地の耕作》)。しかし、近

世社會の商業史を通觀したフオルボネにとつては、國際社會における協調はありえないとする。そこでは、いわば經濟斗争の戰略が支配する。一國民が富裕になるのは他國民が貧困になるのを意味する。自由放任は、ただ對外的戰略圈の嵐の中で、部分的に許されるものにすぎない。彼の眼には、國の外にまで押し進められた自由放任論が一べんの夢物語りに見えたに違いない。

もともと國際經濟社會における自由放任論が可能になる前提は、少くとも、(一)國內的總合生産力が他國に比して壓倒的に優位している、國においてか、(二)國際經濟における立地條件において優位し、そこでの特産的輸出生産物がその國の基幹産業に屬しているか「ケネーのレセ・フェール論は大凡この前提に立つ」、のいずれかであろう。かかる前提は歴史的に刻々と變容されるべきであるから、一定の制度を前提とするかぎりそれは恒久性をもたえない。また、そこには通商諸國が進んでレセ・フェール策を一樣に採用するという無理がある。いずれにしてもそれは特定の政策としての意味はあつても原理的な根據をかく。何よりも、現實の資本主義の世界史的な展開は自由放任論の現實性をうばい去つた。したがつて、ケネーの平和構想の提案の意圖は十分に尊重されねばならないが、問題を世界資本主義のリアリスティックな展望という点にのみ限るならば、ひややかに症狀を打診する醫師の役目を負わされたわれわれとしては、フオルボネの方に——彼のそれに對する政策的對應の仕方がいかなるものであれ——軍配をあげなければなるまい。